

山火事の影響 樹種で異なる

南陽・秋葉山再生会議

南陽市の秋葉山で1年前に起きた大規模な山火事を受け、市や県などでつくる「秋葉山再生連絡会議」が13日開かれ、現地確認後に

市内で意見交換した。自然の復元力が見て取れた一方、樹種によって異なる影響の度合いを注視していく必要性が指摘された。

本年度の第1回会合で市や県置賜総合支庁、林野庁東北森林管理局などの関係者約15人が旧山小屋周辺から山頂に通じる登山道を歩

き、植生状況を見て回った。その後、市民体育館研修室で意見交換した。



秋葉山の植生状況を見て回る関係者 〓南陽市

同会議アドバイザーの野堀嘉裕山形大名菅教授は「完全に燃えてしまったアカマツは想像していたより多い印象。芽吹いたナラは再生に向けて強い力を発揮する可能性が高い」と説明。現地で見られたツツジをはじめ、高山植物のヒメサユリが自生したとの報告にも触れ「貴重な存在。花を増やすことでシンボルになり得る」などと話した。

今後、上空からドローン撮影し再度、焼失エリアの区分けを行い、再造林に向けた検討を進める。

(佐々木亨)